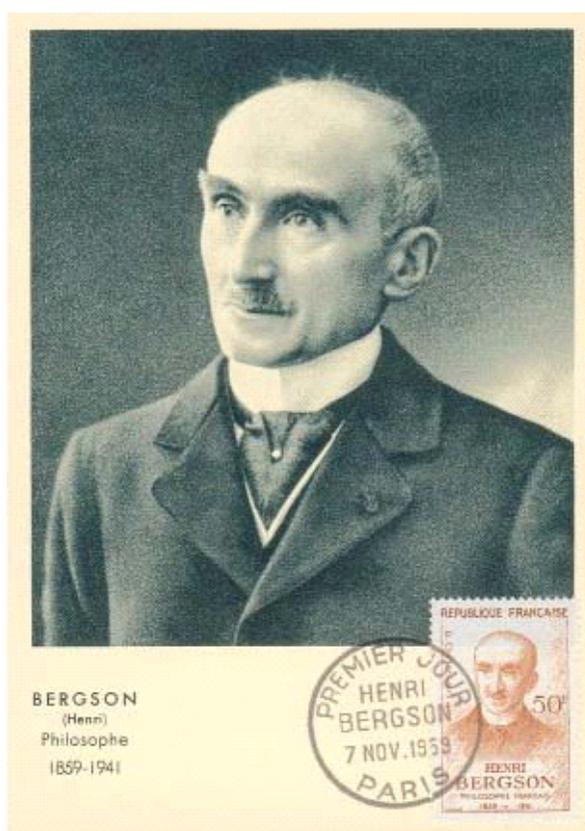


ベルグソンの「いのちの理論」

創造的進化—エランヴィタール

[ベルグソン紹介 第2回]



2007-7-18

野口幹夫

目次

はじめに

第Ⅰ部、「創造的進化」を読む

- 1、知性の限界、科学の限界
- 2、いのちの本質
- 3、いのちのはじめと成長の道の分裂
- 4、動き続ける生命の躍動（エランヴィタール）と創造的進化
- 5、植物と動物の連携
- 6、生命の進化の意味

第Ⅱ部、書かれた時代の科学

第Ⅲ部、その時代の社会と影響

はじめに

ベルグソンは生涯かけて「いのちとは何か」を問い続け、誰もやったことのない方法で解明に努めた。その説明は、だれもが体験する基本的なことから始まり、近代科学の成果を克明にフォローしつつ、かつ科学の方法では「いのち」は解明できないことを哲学の言葉で説いた。このことはベルグソンの生涯を通じて一貫して深められていった。

今回は彼の主著の一つ「創造的進化」によって、彼が打ち立てた「いのちの理論」を紹介する。

「認識の理論と生命の理論は互いに不可分である。」と述べているように、今到達した人間の叡智自身のあり方を究明する中で、宇宙規模で展開する躍動の「いのち」の本質を描き出したのである。

原著は、自らの理論を論証するために、これまでの諸理論の誤りを丁寧に論破している。ここではそういった部分は省略し、その理論の本筋を抽出して紹介したい。

それは説かれてみれば驚くものであっても、納得しやすいものである。

第 I 部、「創造的進化」を読む

1、知性の限界、科学の限界

まずはじめの結論としてベルグソンは、「いのちは科学では解明できない。いのちの探求は認識論の探求と重なる。いのちは直観に支えられた哲学によってのみ解き明かされる。」と述べる。その根拠について次のように論を展開する。

われわれの知性は、未知のものに出会ったとき、つとめて既知のものに類似しているものをさがす。また知性は、<同じものは同じものを生む>という原理を適用することができるように、同一のものを捜し求めるといってもよい。日常的な未来の予見は、このようにしてできるということは経験の示すとおりである。科学は、この操作を可能なかぎり最も高次の厳密さと正確さで高めていくが、この操作のもつ本質的な性格を変えはしない。ということは、科学は日常的認識と同じく、事物の反復相しかとらえないのである。還元不可能なもの、不可逆的なものは科学になじまない。

生命の現象は、起きたことは繰り返さない。言うなれば還元不可能なものであり、あるいは成長のように、順序を逆にすることができない不可逆的なものであり、そこに生命の本質があるとすれば、科学で扱うのは無理があり、そこにこそ哲学の任務がある。

知性は人間の独占ではないが、一般に動物は知性より本能に優れている。人間と同じく、道具をもっていてもそれは身体の一部をなし、使いこなすのは本能である。動物の本能は有機的な道具を作り使用する能力があるが、人間の知性は無機的な道具を製作したり使用する能力である。道具と機械の発明が人間になる本質的な歩みであった。知性とは、人為的なものを作る能力、特に道具を作るための道具を作る能力であり、それを無限変化させる能力である。

とはいえ、本能と知性、どちらかが優位ということではない。本能と知性は同じ問題を解く二つの解決であり。どちらも手際のいい解決である。

ところで生物が意識を発揮するのは、餌を求めるといった、なさねばならぬ潜在的活動と実際の活動との間に差があるときである。ひろく云って動物のみならず植物にも意識が発揮する瞬間がありうる。むろん植物より動物はずっと意識的である。

認識は本能でも知性でもできるが、それぞれに特徴がある。

本能による認識は事物に向かい、知性による認識は関係に向かう。

社会の共同的行動を作るために人間は知性的なしるし（人間の言語）でお互いを結び、昆虫は本能のしるしで結ぶ。

ただし知性が表わすのは、ものごとを分断して認識するようにつとめるため、非連続的で、不動性を帯びる。知性はものごとを分解し再構成する能力である。

しかし、人間は知性の理論によって、分解し分析できる無機的な物ばかりでなく、生命をも思想をも、すべてを包含しようと努力する。しかし知性が思考するのは非連続の形式のもとであるため、知性は生成をとらえることができない。与えられた諸要素に分解して、再構成することは得意である。それでは生命の本質的な連続の相を取り逃がしてしまう。知性ができることは生物をあたかも無生物として取り扱い、流動的な実在を停止した個体をもとに考える。いうなれば、知性は生命についての自然な無理解によって特徴付けられる。

これに反して本能は生命そのものに基づいて形づくられる。一次的本能の最も本質的なものは生命過程であるからである。もし本能が外面化して行動となる代わりに内面化して認識となっていたならば、本能は生命の最も奥深い秘密を見せてくれることだろう。

本能による見事な認識の例をあげよう。ある種のスズメバチは生きたアオムシに卵を産み付ける、そのとき中枢神経を麻痺させ、殺さずにおき、卵がかえった時の新鮮な食物となる。彼らは直観、予言的共感によって内側から神経の中枢をとらえているのだ。（人間ならば、解剖して分析する以外、その中枢を知ることが出来ないから、このスズメバチの行為は驚きの目で見ざるを得ない。）

知性は科学という作品を介して、物理的作用の秘密を解明する。生命については無機的用語に言い換えたものしか与えない。自分からそれの中に入っていきはしない。それに対して「直観」は生命の内奥そのものへ我々を導いてくれる。直観というのは利害をはなれ自己自身を意識するようになった本能のことである。その対象について無限に拡大することのできる本能のことである。

人間には知覚と並んで美的能力が存在している。芸術家がとらえようとするのは生命の意図である。ただし芸術は個別的なものにしか到達しない。

しかし物理学が個々の事実を一般法則へ延長するのと同じように、芸術と同じ方向をとりながら、生命一般を対象とする研究を考えることが出来る。

人間にとって、知性は光り輝く中心であり、本能的直観はこの中心のまわりに定

かならぬ星雲を形づくっているに過ぎない。しかしそれは、生命についての知性の限界を教え、他の生命との共感的な交わりをし、我々の意識を拡大させて、無限に続く創造としての生命の領域に我々を導き入れるであろう。

以上のような、「科学では生命は解明できず、それは人間の持つ直観によるのみ把握できる」とするベルグソンの主張は、同感できることではないだろうか。この著書が書かれた20世紀はじめ以降、今日の科学は飛躍的に発展した。生命現象についても、遺伝子の構造など、生命の本質に迫る発見がなされた。にもかかわらず、いや、むしろそれによってこそ生命の本質は遠ざかっていく観があり、ここに書かれているベルグソンの考えはまったく新しいのではないだろうか。

2、いのちの本質

さてベルグソンがその直観の哲学によって見極めた「いのちの本質」の結論をまず見ておこう。それは簡単には納得できないものかも知れないが、まず結論から見ておけば山の頂上から全体を見下ろすことができるようなものであるからである。その姿とは一言で言えば、

「生命は、宇宙の始まりから、全体として一つの中心から発して伝播していく一つの巨大な波である。」

「すべての有機的存在は、最も下等なものから最も高等なものにいたるまで、生命の最初の起原から現在に至るまで唯一の連続する波の躍動の連続である。」

現代宇宙理論は20世紀の後半になって、宇宙は拡大しつつあることを観測結果によって確認し、そのはじめにビッグバンがあったことを理論的に確証した。それはベルグソンのこの直観哲学の結論に対する物理的側面の傍証である。

しかしベルグソンの哲学解は、その上を行く。ビッグバン理論は単なる物質の爆発的拡大のみをとらえているが、ベルグソンは宇宙の始まりは、無限に湧き出る

「いのち」すなわち創造の泉であり、根源的には「いのち」の爆発であると見た。それは今も続く活動であり、我々はそのウェーブフロントに乗っている存在であるという。これは我々の銀河系が膨張を続ける宇宙の波面に乗っているのと同じような表現であるので、それを知っている現代の我々のほうが、ベルグソンの同時代人よりも理解しやすいのではないだろうか。

そして、ベルグソンは、すべての物理的物質は、その「いのち」の創造活動から

派生するものとした。すべての物理的世界は、「いのち」とは逆に、生まれるやその本質上、崩壊の下降運動の過程に入るとみた。熱は冷めるし、原子も単純なものに崩壊する。物理的宇宙は拡大するが、それは拡散するのみである。

このように物質に先行する「いのち」のビッグバンというベルグソンの考えは、科学を信奉する人たちには反発を呼ぶ説であろう。しかし20世紀の宇宙観測は、ビッグバンが扱うすべての観測可能な素粒子のほかに、観測不可能なダークマターダークエネルギーが、宇宙に圧倒的な量で存在することに同意せざるを得なくなっている。要は観測可能なものに基づく20世紀の科学は根底から崩されつつあるのだ。

さて、我々もあずかっている「いのち」の本質は、創造を続ける永遠であり、登り上げつづけるものである。しかし我々は「いのち」そのものではない。地球上に存在する限り、物質の上に、すなわちいくら精緻に構築されようと、所詮物質である身体に依存せねばならない。したがってその寿命は有限であり、やがて崩壊する。死である。しかし死ぬのは身体であり、「いのち」ではない。

生命が、その起原以来、上昇の続く躍動であり、一方生命のない物質が従う物理法則を下降運動だとすれば、生命に対する物質の抵抗は、生命の上昇のためにまず第一に回避されなければならない障害である。いのちの上げ潮は、あるいはその障害に耐えながら、あるいは迂回しながら、そして分岐しながら、進んでいったのである。

これが、当時も今もホットなテーマであり続ける進化論のダーウインの自然淘汰説や、突然変異説など、本来は超長期的なテーマを、短期的なあるいは微視的な観測に基づく論議に対するベルグソンの壮大な答であった。

この直観的認識を形作った根拠を詳しくみていこう。

3、いのちのはじめと成長の道の分裂

生命の最も原始的な形態にみられる諸現象については、それがまだ物理化学的段階にあるものなのか、それともすでに生命段階に踏みこんでいるものなのか、明言することができない程度のもことから始まる。

最初に現われた生命形態は、単純きわまるものであった。それは、ほとんど分化していない原形質の小塊であった。それは、外見上、アメーバのようなものであ

ったが、そこには、高等な生命形態にまで高めずにはおかない恐るべき推進力が内蔵されていた。

生命を持った有機物は成長するが、或る点を超えると、増大するよりもむしろ分裂するものである。生命は、要素がますますその数を増して、さらに分裂しようとするにもかかわらず、それらの要素に統一を保たせることができた。生命はそれらの要素を、分業という絆で相互に結びつけた。人間の身体といった個体で見ても目や肝臓といった複雑な細胞の分業でできているし、蜂や蟻の社会では個体が緊密に結ばれた分業を担うことで成り立つ。

4、動き続ける生命の躍動（エランヴィタール）と創造的進化

生命は、その起原以来、同じただ一つの躍動の連続であり、この躍動が種々異なる進化系統に分岐したのである。一連の追加によって、何ものかが成長し、何ものかが発展してきた。この追加は、その一つ一つが創造であった。

進化は、数百万の個体を媒介としてさまざまに分岐した線の上でおこなわれてきたのであり、それらの線のおのおのが今度是一个の岐路にさしかかり、そこからいくつかの新しい道が放射状に広がる、というようにして、果てしなく進んできたのである。

生命の根原的躍動は、成体となった有機体を介して、一世代の胚から次の世代の胚へと移っていく。成体となった有機体は胚と胚とを結ぶ絆をなしているのである。かかる躍動は、もろもろの進化系統に分かれながら存続しており、これこそが、諸変異の根本原因である。一般に、いくつかの種が共通の元株から出発して分岐しはじめると、進化が進むにつれて、種に分岐がいちじるしくなる。それにしても、もしわれわれが共通の躍動という仮説を認めるならば、それらの種は、或る一定の点で、同じように進化しうるであろうし、同じように進化しなければならないであろう。

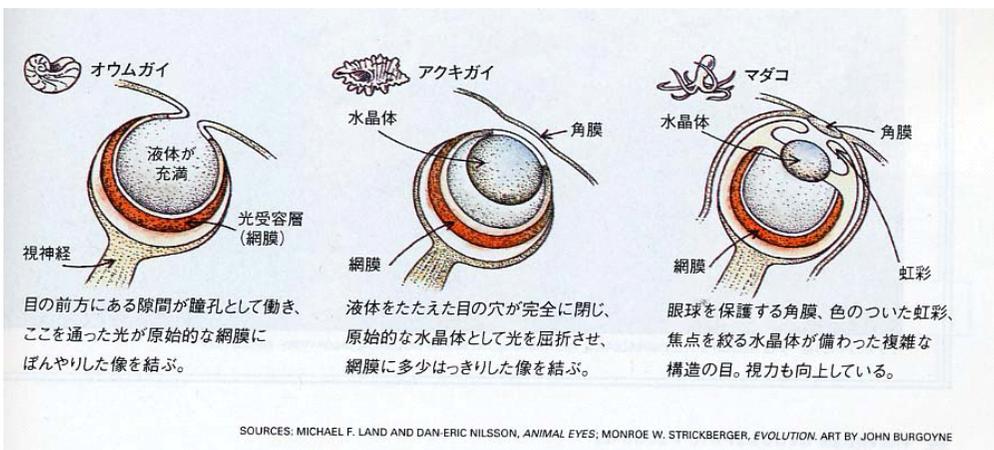
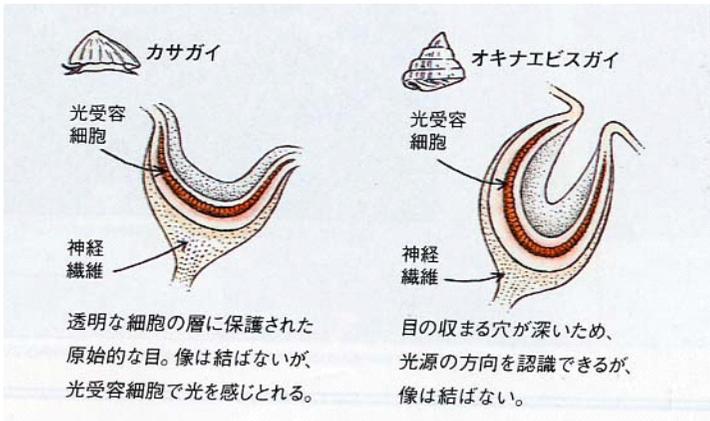
各部分の運動が継続するのは、全体の原初的な躍動のおかげである。してみると、全体の何かが、各部分のなかに存続しているのでなければならない。この共通要素は、何らかのしかたで、たとえばいちじるしく異なる有機体のあいだに同じ器官が認められるということから、明らかにされうるであろう。

そのとき選ばれる進化系統がたがいに隔たっていればいるほど、またそれら進化系統に見いだされる類似の組織が複雑であればあるほど、この証明のもつ納得力

はますます大きなものになるであろう。

われわれはさきに選んだ例、すなわち軟体動物と脊椎動物の眼の形成という例について、このことをもっと明確に示さなければならない。そうすることによって、〈根原的躍動〉という観念も、さらにいっそう明らかになるであろう。

眼のような器官においては、ひとしく驚くべき二つの点がある。構造の複雑さと、機能の単純さが、それである。眼という器械は、複雑で無限に多くの器官からなっている。それにしても、視覚は一つの単純な事実である。眼が開くと、視覚がはたらく。機能が単純なだけに、無限に複雑なこの器官を自然が構成するにあたって、ほんの少しでも手落ちがあったら、視覚は不可能になっていたであろう。次の絵はナショナルゲイグラフィの近刊で進化論を扱った論文からとった。ちょうどベルグソンのこの章を紹介しているような内容であった。



SOURCES: MICHAEL F. LAND AND DAN-ERIC NILSSON, ANIMAL EYES; MONROE W. STRICKBERGER, EVOLUTION. ART BY JOHN BURGOPYNE

さて、これを科学の視点から言えば、目の各細胞は機械の部品であり、目はそれら部品の集合であり、それらを巧みに配置して初めて目という機関が生まれると説明するだろう。

哲学の観点は、まったく別である。われわれからみると、なるほど、有機的に組織された機械の全体は、有機化的作業の全体を十分にあらわしているが、機械の各部分から構成していったとは言わない。

おのおのの生物の視覚は、それが生きていくために有効な視覚であり、生物が働きかけることのできる諸対象の範囲にかぎられている。生きるために光の受容ができればいいものから、蛸のような動きのある動物を捕捉できる視覚のある目に至るまで、この機械の物質性があらわしているのは、もはや使用された手段の総体ではなく、回避された障害の総体だからである。それは積極的な実在であるよりも、むしろ一つの否定である。

ここでベルグソンは、彼独特の比喩として、ヤスリクズに手を突っ込んだときに見える形を思い浮かべるように読者をうながす。突っ込む手の努力が大きくなれば、手はそれだけいっそうやすりくずの奥深くへ突き進む。しかし、手がどの点で停止しても、微粒は瞬間的かつ自動的に釣合いがとれ、相互に調整がつく。視覚とその器官の場合も、同様である。視覚を構成する不可分な行為が多少ともさきへ進むにしたがって、視覚器官の物質面をなす相互に調整のとれた諾要素の数に多少の相違が出てくるけれども、それらの秩序はどんなときにも完全無欠である。

くりかえしていうが、秩序を生じさせる真の過程には諸部分など存在しないのであるから、秩序は部分的ではありえない。ひとまとまりのものとして、完成した形でしか生じえないのである。この原因が視覚の方向に進む程度に応じて、下等有機体の単純な色素群〔眼点〕が生じたり、セルプラ〔ヒトエカンザシ〕の原基的な眼が生じたり、アルキオバのすでに分化した眼が生じたり、あるいは鳥の驚くほど完成した眼が生じたりする。けれども、これらの器官は、複雑さの程度はまちまちであっても、必然的に同じような調整を示しているであろう。

この歩みは、生命の根原的躍動によっておこなわれ、この運動そのもののなかに含まれている。だからこそ、この歩みはさまざまな独立した進化系統にそって見いだされるのである。

ところで、この歩みが生命の根原的躍動に含まれているのは、なにゆえか、また

いかにしてか？そう問われるならば、われわれはそれに答えて、生命は何よりもまず、只の物質にはたらきかける一つの傾向であると言うであろう。もちろん、このはたらきの方向はあらかじめ決定されているわけではない。したがって、生命がその進化の途上でまきちらす形態の多様さには、予測を許さないものがある。むしろ、このはたらきはずねに、多少とも高い程度において偶然性の性格を帯びている。進化は目標を目指しているのではない。

進化は前進運動だけではない。足踏みも脱線も後退もある。進化運動を分裂させる同じ原因によって、生命は、進化の途上で自ら放心し、自分が生み出した形態の上で惰眠をむさぼる。

5、動物と植物の分岐

動物と植物の分岐は栄養の取り方であった。鉱物のまま摂取するか、有機物としてとるか。その差は植物の固定と動物の移動に現れた。

もっとも下等な有機体もそれが自由に動く限りにおいて意識的である。意識を支えているのは運動であり、その働きが消滅するや意識は眠り込む。

感性と目覚めた意識とによって動物を、眠った意識と無感覚で植物を規定できる。動物に神経と神経中枢をそなえさせたその同じ躍動が、植物ではクロロフィルの機能に到達したに違いない。この二つがエネルギーの取得にかかわる。

植物と動物の二つの世界を結ぶものは何か。太陽エネルギーの連続的蓄積とそのエネルギーを非連続的に自由消費すること、このことがこの二つの世界を結ぶ。エネルギーの蓄積がその使用を目的とすれば、生命の進む方向は動物の方にある。地中の微生物の窒素固定、植物の炭素の有機化、その消費者たる動物、この三者は生命が内包していたものが分裂したものである。

動物のエネルギーのシステムは感覚—運動系に奉仕するように出来ている。餌を探す、危険を回避するといった行動のために、神経は働き、その動物の進路を選択する。そのため動物をより柔軟な形態にと向かわせた。

そして、最も成功した進化は、地球全体をおおうような種である。それは人類であり、昆虫、特にある種の膜翅類である。人類の知性に対していうならば、膜翅類ほど本能を発達したものはない。

このように、植物的麻痺と、本能そして知性、この3つが生命的衝動の中で生まれた三つの要素である。これらは継起ではなく分岐である。どれが上位であると

はいえない。またそれらは純粋な状態ではない。お互い浸透し入り混じっている。植物でも動物的な意識と動性が目覚めることもあり、動物も植物的生活に切り替えという不断の脅威の下で生きている。知性も本能も出来上がったものではなく、二つの傾向である。

知性が物質に適合し、直観が生命に適合する。意識が直観と知性に分裂したのは物質に適合すると同時に生命の流れに従う必要によってである。生命を意識そのものに結びつけることを示唆している。

6、生命の進化の意味

さてここから総まとめの章に入る。

いのちを宇宙始まって以来拡大し続ける波として、いのちを植物と動物を含めた全体像として捕らえたベルグソンは、さらに物質世界にまでその視野を広げていく。

意識

生命の進化の意味、それはあたかも大きな意識の流れが、物質の中に浸透し、巨大な多様性を生み出した。植物などは眠り込んだが、動物の活動を助けた。そこに直観と知性を生んだ。直観は生命に結んでいるが、遠くまでいけなかった。意識は自己を解放するために、まず植物と動物という二つの相互補足的な部門に、有機的組織を分割しなければならなかった。ついで意識は本能と知性というこの二つに出口を求めた。意識は本能の側ではこの出口を見出さなかったし、知性の側でも動物から人間への突然の飛躍でしか到達されなかった。

ここで云う意識とは、我々各人のうちに働いているような衰弱した意識ではない。我々の意識が、その原理に一致するためには、出来上がったものから離れて、できつつあるものに結びつかなければならない。

物質的世界と生命

実在は永続的な成長であり、果てしなく続けられる創造である。すべての有機体の運動は、新たな何かを世界にもたらす。それは形態の創造でしかない。なぜなら我々は生命の流れそのものではない。すでに物質を担っている生命の流れであるからである。

(有限の時間で崩壊する身体の上ののっているいのちという意味で、制約された

いのちの形であることを云っている。)

人間は物質を利用してさまざまなものを作るが、物質は作り出せない。宇宙のはじめから永続的な創造の波は、物質の創造も行ったのである。それは意識であり、いのちを生み出すものであるとすれば、その創造の流れが瞬間的に中断されるようなときこそ、物質の創造があるのだ。今我々が知るすべての物質の基本にある原子とはまったく異なる実在、まったく別の秩序に属する実在もある。

(このベルグソンの推論は、現代の宇宙観測で、ダークマター・ダークエネルギーの発見があって、それが正しかったことが証明された。)

宇宙の発生はすべて一挙になされたものではない、活動的な持続が存在し、創造と成長が一つのものなる。宇宙は出来上がったものではなく絶えず作られるものだ。宇宙はおそらく、新しい世界をつぎつぎに加えながら無限に成長しているのだ。

進化論とともに、当時確立された物理学の二つの原理である「エネルギー恒存の法則」と「エネルギー散逸の法則 (エントロピーの原理)」についてのべている。この二つは、彼の哲学にとっての反論として存在し、それに言及せざるを得ない原理だからだ。

彼はまずこれら2つの法則は、科学が測定できる量としての法則であると述べ、現実には、性質の異なるため、計測できない種々のエネルギーが存在する。身近なものでは生物エネルギーがあり、これはエネルギー恒存の法則に反するものであると云っている。

熱力学の第2原理の本質は、すべての物理的変化には下落して熱となる傾向があり、熱そのものは物体の中に均等に配分される傾向にあるということである。物理学はエネルギーを拡がりのある微粒子に結びつける。その範囲ではエントロピー拡大の法則は成り立つ。しかし彼の視点はさらにエネルギーの根源に向かいそれは空間の外にこそ求めなければならないと述べその世界ではエントロピーの法則は成り立たないことを云っている。(これも現代物理学の真空のエネルギー説とともにその予言が裏付けられつつある。)

あらためて要約すれば、物理的無生命の存在は、たんに大意識の緊張の中断したものと現われる。かかる実在を支配している秩序は自然の法則によって示されるものであるが、それは逆の秩序、すなわちいのちの創造の秩序が廃止されるときに自ずと生じてくる。意志の弛緩は、まさにこの廃止を生ぜしめるのだ。かかる実在の方向は、壊れていく事物という観念を暗示する。この事物のできてい

く過程すなわち創造の過程は、物理的な過程と反対の方向を向いており、この過程は定義そのものから言って非物質的である。それはいのちの過程であり、生命のうちに物質の下る坂を逆に上ろうとするひとつの努力を示す。

わが惑星の表面では、進化する生命は物質に結び付けられている。もし「いのち」が純粋な意識、まして超意識であったならば、「いのち」は純粋な創造的活動であり続けるだろう。実際には生命は一つの有機体に釘付けされており、この有機体は生命を無機的な物質の一般的法則に服従させる。けれども「いのち」はあたかもかかる法則から自己を解放するために全力をつくしているかのようである。無尽蔵ないのち貯蔵所からたえず噴流がほとぼしり出て、この噴流の一つ一つが落下して世界となる。この世界の内部におけるもろもろの生物の種の変化は、根源的噴流の最初の方向の残存部分、すなわち物質性とは逆の方向に向かって続けられる一つの衝動の残存部分を示すものである。

もろもろの世界の湧出の中心は一つの事物ではなく、一つの連続的な湧出である。このように定義されるならば、神は出来上がったものを何もかも持たない。神は不断の「いのち」であり、行動であり、自由である。創造は神秘ではない。我々が自由な行動するやいなや、我々は自己のうちに創造を体験する。

「いのち」は一つの運動であり、物質性は逆の運動である。この二つの流れは一つの共存形態が生じる。それが有機的組織である。これを我々の悟性は時間空間における外的な諸部分と見てしまう。単一な躍動がいくつもの世代を貫いて、個体を個体に種を種に結びつけ、生物の全系列をして物質の上を流れる唯一の巨大な波たらしめているが、それには気づかない。科学のような分析型の知性でなく、精神で見る、行動能力に内在している直観能力で見ることができれば、すべては運動と見えてくる。

生命過程と進化運動における本質的なものと偶然的なもの

生命過程で必然的なのは、エネルギーを徐々に蓄積すること、このエネルギーを変化しうる不確定な諸方向に伸縮自在に発現させること、その方向の末端には自由な行為がある。

その形態は宇宙のほかの太陽系においても、そこで生命に課せられる諸条件の元で同じ成果を得るのに最もふさわしい手段を選ぶはずである。

すべての星にしがみついているすべての世界において生命は可能である。そればかりか、生命はいわゆる有機体の中に集中してかたちをとる必要すらない。エネ

ルギーがまず蓄えられ、ついでこのエネルギーがまだかたまり物質を貫いて流れる替わりやすいさまざまな線の上で消費されるということも考えられる。

「いのち」の本質はそこにある。(地球外生命の予言であり、あるいは我々の有機体に縛られた生命を終えた後の、次の「いのち」のかたちを示唆しているととてもおかしくない。)

生命は心理的な秩序に属する。心的なもの本質は相互に浸透しあう錯綜した多数の項を内包しているところにある。個性と連合の二重の方向における生命の進化は「いのち」の本質に根ざしている。

「いのち」の根源は意識むしろ超意識である。それは創造要求であるからそれが可能のときにしか姿をあらわさない。たとえば進化の飛躍の機会が見えてきたとき、大いなる選択に直面するだろうが、そのような大選択の可能性が出てくるとき意識は目を覚ます。

同じように小さなスケールで見ても、我々有機体と意識との間の連帯関係は何か。動物の種々な神経中枢は行動の複雑な選択と対応している。しかし意識は脳から湧き出すのではない。むしろ脳と意識とは互いに対応している。生物がなしうる行動の自由な選択の量を、脳の構造の複雑さが対応し、意識はその目覚めの強さによって示すものだからである。脳のある状態はそれに対応する心理状態の中に行動が生じ始めていることをあらわすものである。

人間の脳ももろもろの運動機構を整備するために作られている。その機構の数、人間の選択しうる引き金数は無限である。その点が他の動物と違う。制限されたものと無制限なものとのあいだには、閉ざされたものと開かれたものとの隔りがある。

人間性

人間は進化の末端でありある意味で目的である。「いのち」は全体として一つの中心から発して伝播する一つの巨大な波で、この波はその円周のほとんどすべての点で停止し、その場で振動に変じる。ただ人間の一点で障害が押し切れ衝動は自由に通り抜けた。意識は人間とともに高所に登り果たして、地平が眼前に展開するのを見ることができた。

意識は直観であるべきであった。知性は逆の方向に向かいそれを制約する。それは物質の運動に律しられている。完全無欠な人間性があるとすれば、そこではこの二つがともに十分な発達段階に達していることであろう。哲学は直観が精神そ

のものであり、「いのち」そのものであることに気がつく。直観のうちに身をおいて、そこから知性に進んでいくとき、はじめて精神的生活の統一を認識する。

身体的生活と精神の生活

かくして哲学はわれわれを真の精神的生活に導く。それとともに、哲学は精神の生活と身体的生活との関係を明らかにしてくれる。

長い間人間が望んできた、物質に対する人格の独立性や、人格不死の確からしさ独立した生活を保ちうる「魂」の存在などに対して、科学は立ちほだかった。

魂はどこから来るか？両親の身体から受けついで一つの混成細胞からきわめて自然に出てくるのが目のあたりで見られるこの身体に、魂は、いつ、いかにして、なにゆえ、はいってくるのか？

もし直観哲学があったとしても、それが現存を静的な姿で見る限り、それらの問いはすべて答えられないままにとどまるであろうし、直観哲学は科学の否定となり、早晚、科学によって一掃されることになるであろう。

けれども、直観哲学が、もはやあれこれの特定の生物ではなく、その発生から宇宙の規模に目を向けるならば、「いのち」を世界に投げ入れた最初の衝撃この方の「いのち」全体は、物質の下降運動によって逆らわれながら、高まっていく上げ潮のようなものにみえてくるであろう。

この潮の流れは、ほとんどその全表面にわたって、さまざまな高さのところで、物質によってその場で渦巻に変えられる。この流れは、そういう障害を身にひきずりながらも、ただ一つの点において、自由に通過する。流れの進行は、この障害のために鈍らされるが、止められることはないであろう。この一点に人類がいる。そこにわれわれの特権的な状況がある。

一方、この上げ潮がすなわち意識である。この上げ潮は、あらゆる意識と同様、相互に浸透する無数の潜勢力を蔵している。この潮流は、幾世代の人類をとおり、個体に分裂しながら、流れていく。

かくして、魂はたえず創造される。或る意味では、魂は先在していた。

魂とは、人類の身体をとおして流れていく「いのち」の大河が、分岐して生じた細流にほかならない。流れの動きは、経路の曲折に従わなければならないにしても、経路とは別ものである。意識は、それが生気づける有機体の移り変りを、いくらかは身にこうむるにしても、有機体とは別ものである。

或る意識状態が思い描いているなすべき行為は、いつでも神経中枢のなかで実行開始の命を待ちうけているから、脳は意識の運動指示にたえず気をくばっている。けれども、意識と脳との相互依存はその点にかぎられる。それゆえにこそ、意識の運命は、脳物質の運命に結びつけられていない。要するに、意識は本質的に自由である。意識は自由そのものである。けれども、意識は、物質の上に身を置き物質に自己を適応させることなしには、物質をつらぬくことができない。

この適応こそ、いわゆる知性の本分である。知性は、活動する意識すなわち自由な意識を、物質がうまくはまりこむいつもの枠のなかに、自然に入れてしまう。したがって、知性はつねに必然性の形のもとに自由をとらえるであろう。知性は、つねに、自由な行為に内属する新しさ、すなわち創造を見のがすであろう。知性は、つねに、行動そのものの代わりに、人為的近似的な模造を置くであろう。これは、古いもので古いものを、同じもので同じものをつくって得たものである。この限界や、困難は、知性を直観のなかにふたたび吸収しようと努力する哲学からみると、そのほとんどは自然に解消する。

けれども、この学説はたんに思弁を容易ならしめるだけではない。この学説は、また、行動するための力、生きるための力を、いっそう多くわれわれに与えてくれる。なぜなら、この学説をもってすれば、われわれはもはや人類のなかで自分が孤立しているとは感じないし、また人類も、自分の支配する自然のなかで孤立しているようには思われなからである。きわめて微小な塵埃もわれわれの太陽系全体と連带的であり、物質そのものというべきあの不可分な下降運動に、太陽系とともにひきずりこまれている。同様に、すべての有機的存在は、最も下等なものから最も高等なものにいたるまで、「いのち」の最初の起原からわれわれの時代にいたるまで、あらゆる場所、あらゆる時を通じて、唯一の衝動、いいかえれば物質の運動とは逆の、それ自身において不可分な、唯一の衝動を、ありありと感じさせるばかりである。すべての生物はたがいに関連しあい、すべてが同一の恐るべき推進力に従っている。動物は植物に依存し、人間は動物に跨っている。人類全体は、空間においても時間においても、一つの巨大な軍団をなし、われわれ一人一人のかたわら、われわれの前、われわれの後を驍進する。そのめざましい進撃は、あらゆる抵抗を撃破し、幾多の障害を、おそらくは死をさえも、克服することができよう。

この感動的な一文で『創造と進化』の主要な章を閉じる。

第Ⅱ部、書かれた時代の科学

「創造的進化」は1907年に出版された。コレージュ・ド・フランスの哲学教授として、研究著作活動がもっとも活発な時期に書かれた主著である。終生の大作である『道徳と宗教の二源泉』にいたる一里塚となった。

この時代の科学のホットなテーマは、ダーウインの種の起源に始まる生物進化論で、スペンサーの社会進化論につながり、ベルグソンも学生時代これを詳しく研究した。そして本著でその限界を論破している。

一方、物理学では、光の速度の不変性を説明する理論としてアインシュタインの特殊相対性理論が生まれたばかりであった。ベルグソンは哲学的な時間のとらえ方と相対理論に生まれた時間の相対性について、アインシュタインと対話したことは有名なエピソードである。しかし、この時代はまだ原子核の構造も知られず、またそれを説明できる量子力学は生まれていなかった。宇宙観測も光学式があったばかりで、ビッグバン理論も宇宙の拡張の発見もまだまだ先のことであった。ダークマターの発見もまだなされていなかった。総じて現代物理学の萌芽時代であった。

哲学は完成された体系ではなく、科学とともに歩む哲学こそ真の哲学と考えていたベルグソンであるから、彼の死後に爆発的に進んだ科学の進歩で、さらに進んだ展開がされたはずである。しかしこの「創造的進化」で語られる「中心の一点から止まることなく広がる意識の世界」というのは、ビッグバンから始まり、膨張し続ける宇宙という20世紀後半の発見を先取りしている。また「原子とまったく異なる実在」は後の発見のダークマターを、「物理学はエネルギーを拡がりのある微粒子に結びつける。エネルギーの根源は空間の外にこそ求めなければならない。」は真空のエネルギーやダークエネルギーの発見を先取りしている。現代物理学の最先端であるビッグバン理論は、科学というよりベルグソンの哲学に足を踏み入れたものといえるのかもしれない。

総じて、あたかも現代物理学を熟知しているがごとくである。

この著書の後に起きる現代科学の発展によっても、ベルグソンはなんら根本的な修正を必要としないばかりか、たとえば生命科学の進展、DNAの発見や脳構造の精緻な知見の進展があっても、いのちの謎は深まるばかりで、科学の分析手段では生命は解明されないと切り切ったベルグソンの直観哲学が今こそひかり輝いているのである。

第Ⅲ部、その時代の社会と影響

1907年という年は、ヨーロッパやロシア・日本と連動して大破局への不気味な胎動が始まった時代であった。第1次ロシア革命がおきた年であり、東京の株は暴落して恐慌のはしりが見えた。夏目漱石が東大の教授をやめ、安定した給与を保証してくれる朝日新聞に入社した年である。人々の心は不安であった。

そのような人心を背景に人類を励ましてくれるベルグソンの哲学は、まずヨーロッパ民衆にとって福音であった。コレージュ・ド・フランスで彼が講演するとき、学生ばかりでなく、一般民衆も、どっと聴講に押し寄せた。オペラ座に場所を移したらどうかという提案まであった。

争い殺しあうばかりの醜い人類は、このままで終わるのではない。温和で愛に満ちた輝かしい新人類への進化の夢を、「エランヴィタール」の言葉に嗅ぎ取った若者たちは、ベルグソンの著書を背囊に忍ばせて第一次大戦の戦場におもむいていった。

この著作の後のベルグソンは、フランス政府の文教政策に関与を求められ、閣僚級の仕事をこなした。時代はついに第一次大戦に突入する。勝者も敗者も疲弊した戦後の世界構築のため、希望を持って作られた国際連盟のフランス委員として活躍する。しかしその希望はまたたくまに消え、次の混乱へと、つまり第2次大戦への激動の時代に入っていく。ベルグソンはリュウマチによる体の不調もあって、国際連盟の仕事をやめ、再び研究生活に戻り、この『創造と進化』の先の哲学を深めて行った。その大成は『道徳と宗教の2源泉』『精神のエネルギー』によって見るができる。

ナチスの占領下の凍てつくパリで1941年1月、ノーベル賞受賞者への尊厳も払われることなく亡くなった。

ベルグソンが世界の精神世界に与えた影響は、じわじわと進んだ。フランス、日本で時代を切り開いた哲学者で彼を真摯に学び自分のものとした人は多い。しかし、唯物論科学主義が行き詰まり、競争至上の資本主義が克服されねばならぬ欠陥を緊急のものとしている21世紀の今からこそ、本当の開花をするであろう。

(後書き)

高校時代の恩師の加藤先生に導かれてベルグソンに近づき、終生のテーマとして学んでいきたいと願っている。その加藤先生の娘さんが主催される名古屋の小劇団パオは、昨年10月「エランヴィタール～時空を越えて～」を上演された。子を墮ろして失意に落ち込む女の子が回生していく話であるが、「エランヴィタール」を題名とされた驚きと喜びを先生とともにした。

ベルグソン紹介シリーズ第1回は2004年1月に『笑について』を報告したが、次回3回目は、『「道徳と宗教の二源泉」の今日的意味』をテーマとしたい。



ベルグソンの墓